【人はパンだけで生きるのではなく】
～聖書の食物といのちの言葉～

［伝道的説教］

『マタイの福音書』

4章1～4節

熊　谷　徹

2013年10月13日（第2主日）

【序】食欲の秋；

NHKの最近の調査によると、子供たちの嫌いな野菜の第一位が茄子、第二位がピーマンだそうだ。私の好きな野菜の第一位が子供たちの嫌いな野菜の第一位。これには驚いた。孫達と食べ物の話ができなくなるではないか。それは兎に角、秋は茄子が美味い。「秋茄子は嫁に食わすな」という諺があるくらいである。「秋茄子は美味いが食べ過ぎると女性の体に良くない、だから大事な嫁には秋茄子を食わすな」という意味らしいが、それと正反対の意地悪な解釈もある。そのどちらにせよ、秋茄子が美味いということには変わりは無い。海の幸ならサンマだ。サンマは「秋の刀の魚」と書くように秋が格別美味い。「今はもう秋」という歌があった。「今はもう秋、何を食べても美味しい秋」である。あれもうまいしこれも美味しい。「**何を食べようか**」と迷ってしまう。

「何を食べようか」で思い出すのはキリストの言葉である。キリストはこう仰った；「**わたしはあなたがたに言います。自分のいのちのことで、何を食べようか、何を飲もうかと心配したり、また、からだのことで、何を着ようかと心配したりしてはいけません。いのちは食べ物よりたいせつなもの、からだは着物よりたいせつなものではありませんか。**」（マタイ6：25）。

同じ「**何を食べようか**」という言葉であっても、私とキリストとではレベルが違う。キリストが言ったのは、「目先のことで思い悩むな。神に信頼して明日を思い煩うことをやめよ」という意味である。

天高く馬肥ゆる秋、食欲の秋、味覚の秋がやって来た。今日は食欲の秋にちなんで、聖書が教える食べ物についてお話したい。

【1】菜食から肉食へ；

（1）聖書によると、人類の最初の食べ物は野菜や果物だけであった。つまり今で言う「菜食主義」である。天地創造と人類の創造を語る『創世記』の第1章にこうある；「**ついで神は仰せられた。「見よ。わたしは、全地の上にあって、種を持つすべての草と、種を持って実を結ぶすべての木をあなたがたに与えた。それがあなたがたの食べ物となる。**」（創世 1:29）。

ここには人類の食べ物は「**種を持つ草**」と「**実を結ぶ木**」であると記されている。「種を持つ草」は穀物や野菜のことであり、「種を持って実を結ぶ木」とは果物のことである。また、ここでは「種を持つ」ということが強調されている。「種を持つ」のヘブル語の直訳は「**種を生み出す**」(BDB;関根訳「種を生じる」)である。この表現は単に「持つ」という以上に、種の生命力を感じさせる。生み出された種はまた新たな種を生み出し、命を次の世代へ繋いでゆく。「種」の中にはそういう命、生命力が秘められている。「《種を生み出す》草や《種を持つ》実を食べよ」とは、「うちに生命力を秘めた穀物・野菜・果物を食べよ」ということである。玄米と白米との決定的な違いがここにある。白米は美味しくする為に玄米のうちにある「胚芽」という生命を秘めた部分を削ぎ落としたものである。白米は玄米よりも確かに美味しいが、生命力という点からしたら玄米には完全に負けている。また、「種」には素晴らしい栄養が隠されている。その代表がカボチャの種やゴマである。そうした野菜果物、即ち「**種を持つ**」植物、「**種を生み出す**」野菜果物を食べよと神は人類に命じた。これが聖書が教える人類最初の食べ物である。

(2)今述べたように、神は最初の人間アダムとエバに菜食を命じた。ところがその後、人間は神の命令を無視して肉食を始めた。聖書によればその理由はこうである…。天地創造の後、アダムとエバはエデンの園で神に対して罪を犯した。その結果、人間世界に死が入り込み、同時に自然界の調和が破壊され、全ての「**被造物が虚無に服した**」(ロマ 8:20)。創世記第3章はこう告げる;「**[神は]アダムに仰せられた。「あなたが、妻の声に聞き従い、食べてはならないとわたしが命じておいた木から食べたので、土地は、あなたのゆえにのろわれてしまった。あなたは、一生、苦しんで食を得なければならない。**」(創世 3:17)。

「**土地は呪われてしまった**」とあるように、自然界全体が「呪い」のもとに置かれてしまったのである。その結果生じたのが、アダム夫妻の裏切りあいと罵りあいである。そしてそんな二人の間に生れた子供たちのうち、兄のカインが妬みにかられて弟アベルを殺してしまった。人類最初の殺人事件である。ここに初めて人間が同じ人間の血を流したのである。そしてそれ以後、人間は動物の血を平

気で流すようになった。それだけではなく、殺した動物の肉を食べるようになったのである。

一方、平穏だった自然界でも、弱肉強食という熾烈な生存競争が始まった。動物が動物を襲い、血を流し、その「肉を食う」という修羅場が出現した。そうして全世界の「土地は呪われてしまった」。こうして全世界が罪に覆われ血にまみれた後に訪れたのが「**ノアの洪水**」という恐るべき神の裁きであった。全世界を一掃するという裁きが終わった時、神は再出発しようとする人間ノアに肉食を許可した。創世記第9章で神はこう言う;「**生きて動いているものはみな、あなたがたの食べ物である。緑の草と同じように、すべてのものをあなたがたに与えた。**」(創世 9:3)。こうして人類に「神公認の肉食」が始まったのである。

(3)以上おおまかに見て来た通り、人類はそもそも菜食であった。肉食は罪の歴史が進展し自然界の調和が破壊されて行く中で生れて来たのである。そしてノアの洪水の後、やむなく神が人間に許可したものなのである。…以上が「聖書が教える菜食から肉食への移り変わり」である。

【2】肉食への規制;

(1)神がノアに肉食を許可したが、それは無条件の許可ではなかった。神はノアにこう言った;「**しかし、肉は、そのいのちである血のあるままで食べてはならない。**」(創世9:4)。血のついたままで肉を食うのは動物のすることである。だが人間は野獣ではない。そもそも血のままで肉を食うのは衛生上危険極まりない。それ以上にこれは「人の血を流す」ことと関連がある。神は「**人の命は血の中にある**」(レビ 17:11)と言う。だから神は、「**肉は、そのいのちである血のあるままで食べてはならない**」と命じるのである。ノアの後も肉食については様々な条件が付加されていった。それらの条件はまとめられてレビ記11章や申命記14章に記されている。その幾つかを紹介する。

(2)**レビ記11章3節**にこうある;「**動物のうちで、ひづめが分かれ、そのひづめが**

完全に割れているもの、また、反芻するものはすべて、食べてもよい」。

これによれば、牛や羊、ヤギや鹿などは食べてよい。食べていけない動物は、らくだ、岩だぬき、野うさぎなど(4-6)。そして有名なのが「豚」(7)。今もユダヤ人とイスラム教徒は豚を決して口にしない。豚肉を使ったハンバーグは勿論、豚肉を使った調味料さえ使わない。だが、魚類は殆ど食べてよい(9-12)。ただしこれにも条件がある。「ひれと鱗のないもの」は食べてはいけないという。これによればウナギは食べてはいけない。イカ、蛸、海老、貝類も食べてはいけない。その他、食べてはいけないものを列挙すると次のようなものがある;鳥では、ハゲワシ、カラス、ダチョウ、フクロウ、コウモリ。昆虫ではイナゴやバッタの仲間以外は禁止。だからエスカルゴは食用禁止。また、モグラ、ネズミ、トカゲ、ワニ、蛇なども禁止。尤も食べる人もおるまいが。また犬、猫、熊も食用禁止である。そして重要なのは「**死んだ動物を食べてはならない**」という命令である(レビ 11:8&c)。

(3)聖書はなぜこのような食事規制をしたのか。その理由は二つある。一つは、霊的な理由からである。**レビ記11章44節45節**にこうある;「**わたしはあなたがたの神、主であるからだ。あなたがたは自分の身を聖別し、聖なる者となりなさい。わたしが聖であるから。地をはういかなる群生するものによっても、自分自身を汚してはならない。**45 **わたしは、あなたがたの神となるために、あなたがたをエジプトの地から導き出した主であるから。あなたがたは聖なる者となりなさい。わたしが聖であるから。**」。

神は、食事という最も日常的な平凡なことを通して、神の前には聖なるものと穢れたものとがあるのだということをご自身の民に教えようとされたのである。イスラエルの民は食事の度ごとに「聖なる神」を思い起こし、その聖なる神の民として自分自身を清く保たねばならないという思いを新たにしたのである。

食事規定のもう一つの理由は、現実的な理由、健康上の理由からである。レビ記などにリストされた動物で「食べてはならない」と命じられた動物は、その殆どが不潔な物を食べたり他の動物を殺して食べる動物たちである。また、それら

の動物は危険な寄生虫や病原体を持っている。「死んだ動物の肉を食べてはならない」という命令も、伝染病の伝染力は動物が死ぬ時に一番強くなるということと関係あるかも知れない。こうした事が、何千年も昔、まだ顕微鏡もなく病原体の存在さえ知られていなかった大昔に既に知られていたとは、驚くべきことと言わねばならない。

《eg》ユダヤ人はこれらの食事規定（彼らはこれを「**カシェル**」と呼ぶ）を数千年に亘り守って来た。彼らの主食は麦である。肉は特別な時以外はあまり食べない。中でも豚肉は決して食べない。来客をもてなす時や祝宴の時には牛や羊を屠って食べたが、その際は「血を絞り出して」火を通してから食べた。動物性タンパク質はおもに魚やイナゴから取った。彼らの主要な蛋白源は植物性タンパクで、その代表が豆である。日本人が納豆や豆腐を好んで食べるのと似ている。また料理をする際も動物性の油ではなく植物性の油を使った。最も好まれたのがオリーブオイルである。彼らは自分たちの土地を「**乳と蜜の流れる地**」と呼んだが、その名の通り彼らは「乳と蜜」を好んで食べた。「乳」は飲み物にするだけでなくチーズやヨーグルトにして食べた。バプテスマのヨハネの「**食べ物はいなごと野蜜であった。**」（マタイ3：4）。このように彼らは聖書が禁じる食べ物を避け、聖書が教える食べ物を食べるように心がけたのである。

《eg》14世紀、ヨーロッパ全土にペストが大流行し、ヨーロッパの人口の3分の1から3分の2が死亡した。その数、2千万から3千万。ところがユダヤ人の死者は圧倒的に少なかった。そのことを不思議に思った人達が、「これはユダヤ人の仕業だ。彼らが井戸や泉に毒を投げ込んだのだ」というデマを流した。そして恐るべきユダヤ人迫害が繰り広げられたのである。あの時、恐るべきペストの大流行の中でユダヤ人だけ極端に死亡率が低かった理由として考えられるのが、聖書に基づく「聖なる物と穢れた物」という思想から来る清潔志向、そして食事である。現在世界で最も平均寿命が長いのは日本人だが、ユダヤ人も負けてはいない。彼らの平均寿命は世界第4位である。単に長生き民族というだけではなく、アイ

ンシュタインやノーベル賞受賞者の異常な多さが象徴するように、極めて優秀な民族である。彼らの優秀さとその食生活の間には深い関係がありそうだ。

(4)ここで一つの疑問が生じる。旧約聖書の食事規定は現代の私達も守らなければいけないのか、という疑問である。時間の関係で結論だけを言おう。旧約聖書の規定は、神に選ばれた特定の民族に特定の期間だけ与えられたものであり、今の私達がそれを守る必要はないというのが結論である。旧約聖書の規定、即ち「律法」は、新しい時代が到来するまでの「養育係り」である。その新しい時代は救い主キリストの到来によって幕を開けた。聖書はこう告げる;「**こうして、律法は私たちをキリストへ導くための私たちの養育係となりました。私たちが信仰によって義と認められるためなのです。25 しかし、信仰が現われた以上、私たちはもはや養育係の下にはいません。**」(ガラテヤ 3:24-25)。

キリストが到来した今、「養育係り」の役目は終わった。律法という「養育係り」はその役目を終えて引退し、言わば「ご意見番」となったのである。「ご意見番」にご意見を聞くのは良いことである。だが、それに縛られる必要はない。そういうご意見番的存在、それが旧約聖書の律法であり食事規定なのである。

【3】人はパンだけで生きるのではなく(マタイ4:1～4);

(1)以上、食欲の秋にちなんで聖書が教える食べ物について語って来た。何を食べ何を飲むか、何を食べず何を飲まないか、これは大事な問題である。肉体を健康に保つためにはパンや穀物、野菜や肉、果物や魚などが必要である。それと同じように、心を健康に保ち霊を健やかに保つために必要な霊的な食べ物がある。それは「神の言葉」である。キリストはこう仰る;「**人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる。**」(マタイ4:4)。

この有名な言葉をキリストが語った経緯はこうである。**マタイの福音書4章1節**にこう記されている;「**さて、イエスは、悪魔の試みを受けるため、御霊に導かれて荒野に上って行かれた**」。

イスラエル南部の死海の東に広大な「荒野」が広がっている。そこにおよそ1

万年前に栄えた世界最古の都市エリコがあった。そのエリコ遺跡の西に、高さ360メートル程の、草も木も何もない岩山がある。「40日の山（ジュベル・カランタル）」とか「誘惑の山」「断食の山」と呼ばれていることから分かるように、キリストが40日間断食した山だと言われている山である。

2節と3節を読もう;「**そして、四十日四十夜断食したあとで、空腹を覚えられた。すると、試みる者が近づいて来て言った。「あなたが神の子なら、この石がパンになるように、命じなさい。」**」。その時にキリストが言った言葉が「**人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる。**」である。**4節**である;「**イエスは答えて言われた。「『人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる。』と書いてある。」**」。

（2）体の健康のために「**何を食べるか、何を飲むか**」は大事なことである。それと同じように、心と霊のために必要なのが「神の言葉」なのである。キリストは「**人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる。**」と言った。「**神の口から出る一つ一つのことば**」には命がある。神の言葉は私達に勇気を与え希望を与える。神の言葉には私達を救う力がある。パウロはこう言った;「**福音は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。**」（ローマ1：16）。

神の言葉は疲れた心に安らぎと平安を与える。キリストはこう言う;「**すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。…わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。**」（マタイ 11：28-29）。

神の言葉は傷ついた魂に慰めを与え、いやしを与える。詩篇の詩人はこう言った;「**これこそ悩みのときの私の慰め。まことに、みことばは私を生かします。**」（詩119：50）。またこうも言った;「**みことばの戸が開くと、光が差し込み、わきまえのない者に悟りを与えます。**」（詩119:130）。神の言葉は光を与え智恵と悟りを与える智恵の言葉なのである。そして御言葉は迷える私達を正しい道へと導いてくれる光である。聖書はこう告げている;「**あなたのみことばは、私の足のとも**

しび、私の道の光です。」(詩119:105)。「**神の口から出る一つ一つのことば**」は私達を生かす「いのちのパン」なのである。

【結び】食べるも飲むも神の栄光のため(1コリント10:31);

(1)そもそも人は何のために食べるのか。勿論生きるためである。このことについて宗教改革者ジョン・カルヴァンはこう言う;「食べるために生きるのではなく、生きる為に食べるのだ、という言葉がある。なかなかうまく言ったものである。ただ、それには、正しい存在の目標が心に留められていなければならない。…私達の食事は、神に奉仕することを目的とする限り、いわば神にあって聖なるものとされるのである」。カルヴァンが言う「正しい存在の目標」とは「生きる目標」である。それは彼によれば次の聖書の言葉に要約される。こういう言葉である;「**こういうわけで、あなたがたは、食べるにも、飲むにも、何をするにも、ただ神の栄光を現わすためにしなさい。**」…「**コリント人への手紙第一10章31節**。

この言葉は、禅宗の道元和尚が言った「法は是れ食、食は是れ法なり」という言葉に通じる所がある。道元は「食」つまり食べるという日常生活と「法」つまり仏の道は不即不離、切り離せないのだと説いた。一方聖書は更に進んで、「**食べるにも、飲むにも、何をするにも、ただ神の栄光を現わすためにしなさい**」と積極的な食の道を説く。「神の栄光を現わす」とは何か凄い特別のことをするということではない。日常の平凡な事柄を通して神の栄光を現わすことはできるのである。「**食べるにも、飲むにも、何をするにも、ただ神の栄光を現わすために**」という思いをもって生きる時、私達の人生は、その食事も含めてすべてが、真に意義ある「生きた」人生となるのである。

(2)キリストは仰る;「**人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる。**」と。この言葉を胸に、「**神の口から出る一つ一つのことば**」を食べて、「神の栄光のために」生きる者となろう。そこにこそ真の生きがいのある人生があるのだから。 ◇